

## 第2版はしがき

本書の初版を上梓してからすでに4年を経過した。この間、幸いにも多くの読者を得ることができ、増刷を重ねることができた。本書を講義の教科書として読み、また一般的な憲法学の状況を把握しようと本書を紐解かれた読者には感謝の言葉もない。近代立憲主義の精神を根底にすえ、可能な限り通説の意味を伝えようとした意図が読者に伝えられたならば、これにすぐる喜びはない。

本書は初学者向けの概説書ではあるが、部分的にはかなり突っ込んだ主張も試みている。そのような主張が「なぜだろう」という疑問を惹き起こし、もう少し勉強してみようという興味・関心がわき起こるなら、本書の使命は果たせたといってよい。

ところで、この4年で政治状況は劇的に変化し、憲法状況もそれに呼応するように劇的な変化を迎えつつある。平成26年(2014年)12月10日に施行された特定秘密の保護に関する法律や、平成27年9月19日に参議院で可決、成立した集団的自衛権行使を可能にする安保関連法、さらに現在行われている共謀罪の新設の再検討など、立憲主義の根幹を揺るがすような事態が生じつつある。

これまで、増刷の際に、非嫡出子の相続分差別を違憲とした平成25年9月4日の最高裁決定など、憲法状況の変化に応じて加筆・補正を行ってきたが、これらの作業では対応できないほどの変化が生じていることに鑑み、第2版として少し大きな改訂を行うこととした。しかしながら、初版のはしがきにあるように、大幅な頁数の増加はかえって本書の性格を変質することになるので、できうる限り簡便な記述に心がけ、最小限の頁数の増加にとどめる努力をした。説明の不十分な点があることだけが危惧されるが、今後さらに簡潔でわかりやすい概説書にすべく改訂を行うつもりである。読者の宥恕を請うのみである。

今回の改訂にあたっては、法律文化社の上田哲平氏に大変お世話になった。ここに心からの感謝の意を表したいと思う。

2016年3月

尾崎利生・鈴木晃

## はしがき

本書は、大学ではじめて体系的に憲法を学ぶ学生や一般教養として憲法を学ぼうとする人に、憲法学の全体像をわかりやすく説明するために書かれた概説書である。その意味においては、本書によって憲法学が「一応」わかったといえればその目的を達したといえるのではあるが、さらに学生の発展的な勉強を期待するものでもある。

憲法に限らず勉強方法に悩む学生が少なからずいる。学生の個性の問題はあるが、平易で少し薄めの本を何回か読んで、全体像をつかんでおくのが良いとよくいわれる。本書の目的の1つはそのような初学者の勉強の道具として活用されることにある。いきなり高い山に登るのは大変であるし危険を伴うものでもある。ほんの少し高い山に何回か登ってトレーニングを重ねることが、やがてはとんでもなく高い山への登頂を可能にするのである。

近年においては、テロに対する正義の実現とか危険社会論を背景にする人権擁護の美名の下で、「国家権力」の意味が変化したかのような立法がなされているように感じることが多い。また、憲法には権利と共に義務をもバランスよく規定すべきであるという、およそ立憲主義とはかけ離れた憲法理解をする意見も学生の中には散見される。このような状況の下で、本書においては、上述のような概説書としての意味の他に、その底辺には大げさにいえば「国家権力」にどう対峙すべきか、つまりは自分の人権をどう守るのかという根本的な問いがある。憲法を学ぶということは結局その問いに向き合うことである。学生諸氏にはその問いに是非とも向き合っていたいただきたいと思う。

本書も入門書である以上、わかりやすい内容にする努力は惜しまなかった。しかし、テレビを観るように憲法を理解することはできない（ある意味ではそれは理想かもしれないが）。わかりやすく説明しても本質的に難解な問題は難解である。少しおかしな言い方になるが、学生諸氏の協力（勉強）がなければわかりやすく説明することはできない。太鼓はバチがなければ鳴らないものであるが、バチが鳴っているものではないのである。読者が本書を踏み台として憲法

への興味・関心をもち、国家や人権への理解を深められるなら著者としては望外の幸せである。

本書においては、概説書ないしは教科書としての性格上、個々の学説等についての注記は控えさせていただいた。巻末に参考文献として掲げたものもごく一部にしかすぎない。本書はそれらの研究業績や、様々な学問的刺激や示唆をいただいた諸先生方の学恩なくして出版されることはなかったであろう。したがって、注記の省略についてはただただご海容をお願いするのみである。

なお、本文中で挙げる判例の出典については、通例の略語表記を用いた。

最後に、本書の出版にあたっては、法律文化社の畑光氏および上田哲平氏をはじめ多くの方々のお世話になった。特に、畑光氏の出版にかける情熱と粘り強さがなければ本書は到底完成しなかったであろう。これらの方々に厚くお礼申し上げる次第である。

2012年3月

尾崎利生  
鈴木 晃